

論稿六の二 大地震の衝撃と破滅からの救済 ニューイングランド一七二七年
(イギリス領その二)

第三章 ニューイングランド聖職者の地震説教

はじめに

第一節 大地震の様相と特別聖儀の実施

第二節 神の御業としての地震

第三節 背徳への鉄槌と改悛への督励

第四節 地震の自然学的成因

第五節 神の鉄槌 その歴史と救済

はじめに

新大陸ニューイングランドにおける地震はジャマイカやリマの大地震と異なり、被害の規模は比較的軽小であるが、住民の恐怖と不安はとりわけ甚大であった。この精神状況を如実に伝えるのは、当地の聖職者による多数の震災史料である。アメリカの研究者ウイリアム・アンドルーズによれば、地震発生から翌年末までにボストンで刊行された説教記録は二四件に及ぶ。これらの執筆者はいずれも著名人であって、多少とも自然学の素養をも有する。各説教の内容はキリスト教的な世界観を基盤としつつ、地震の神学的成因、地震発生の規模と震災の様相、摂理による劫罰と罪過の改悛、さらに副次的な要素として自然学的な記録などにわたる。これらの多くは以後冊子として刊行され、いまはエヴァンス初期アメリカ出版集成としてライン利用も可能である。^①

十九世紀末に上梓されたデロス・ラヴ著『ニューイングランドにおける断食と神恩感謝の日』では、新大陸住民を襲った幾多の災害が追跡され、神による警告さらには劫罰としてそれらに対処するピューリタンの行事が追跡された。一六四〇年から一六七〇年にかけて彼らを苦しめたのは、干魃や洪水や凶作であり、さらにはさまざまな疫病である。たとえば、植民地ブライマウスにおいて百日咳が蔓延し、一六四九年十一月十五日断食が行われ

^① William D. Annwys, *The Literature of the 1727 New England Earthquake. Early American Literature*, Vol.7, no.3, Science and Literature Issue (Winter, 1978) p.294. *Evans Early American Imprint Collection*, on-line.

た。① 各地の教会史料を分析しつつ、ラヴは一七二七年大地震に際する聖儀と説教の概要を考証する。

ラヴ著『ニューイングランドにおける断食と神恩感謝の日』

震動が始まるや、目覚めた住民は街路へ逃げ出し、行く場もなく、慄然と群れをなした。最期のときと覚悟した者もある。最初の衝撃が消えぬ間夜明けまでに四、五回は揺れた。つぎの十日間に三十回揺れ、以後も数週異変が続いて、ほぼ鎮まったのは翌年一月三十日の大きな震動による。地震の続発は人心に深刻な影響を与え、改心を求めて神から授けられた苦難として、聖職者が効果的に説教するに至る。大地震の夜明けには、人々は街路にあふれ、みなが恐怖の体験を語り合った。聖職者はこれを好機としたのである。多年にわたり馬耳東風であったニューイングランドに、神から然るべき裁きを賜ったではないか。コットン・マザーがまず最初に行動した。昼前の十時にオールド・ノース教会の鐘が鳴り、「特別の儀式のため」住民を招集した。ボストンで彼の教会が最大の収容を誇り、それもすぐに一杯となった。他の教役者も駆け参じる。それほど厳肅で緊張した会衆は多年にわたり見られない。教役者がひとりずつ祈捧を捧げ、悔悟の心情から流露する真摯な言葉に信者たちは涙した。安易に考えれば、神恩感謝の儀式で済ませたであろう。しかし、安息日の無視、冒瀆、酩酊、あらゆる種類の不正に対する警告を、これまで彼らは再三受け、知らぬ顔を続けてきた。いまや一夜の戦慄で公衆の良心が覚醒したのである。改悛の情が嗚咽の波へと進んだ。〔中略〕

① W. Deloss Love, *The Fast and Thanksgiving Days of New England*, Boston, 1895. pp.177-180, 183-188.

この聖儀は午後二時まで営まれた。総督代理のグマーもそこに臨席し、ノース教会で礼拝をさらに五時まで引き継ぐよう促す。他方サウス教会には別の会衆が集まり、そこでは八時まで祈捧がなされた。いずれの教会も膨大な会衆で溢れ、教役者のトーマス・フォクスクロフトとジョセフ・スヴァールが『詩編』第四章の四に基づいて説教した。

当然ながら十月三十日は事実上もつとも厳肅な断食日となった。他の地域、ハバーヒルでも同様である。とはいえ、これは最初にすぎぬ。総督代理の勧告によって十一月二日火曜はボストンだけでなく、チャールズストン、マープルヘッド、ブラッドヘッドでも教会の断食日となった。ついで水曜にブルックリン、ハバーヒル、インスヴッチ、金曜にケンブリッジ、ロクスビュリー、ニュートン、アンドヴァー、ウエイマウスと続く。さらに十一月七ドルヘスターへ、同月十六日ハンプトン、レイ、その他ハンブシャー諸都市へ公式に断食日の指定がなされた。また、十一月二日コネティカットで、同月九日マサチューセッツにおいて神恩感謝日にも定められた。〔中略〕地震の衝撃に慄然とした住民は、こうして数カ月深い宗教的雰囲気包まれ、聖職者の厳肅な教えに耳傾けた。①

① Love, *op.cit.*, pp.289-292

第一節 大地震の様相と特別聖儀の実施

さきに述べたロンドン王立協会への寄稿とともに、これら教会の史料はニューイングランド大地震の規模や様相を伝える貴重な証言である。この見地からまず注目されるのは、コットン・マザー編の冊子『地震に関する釈一異変翌朝の説教を含む』であって、前文において地震の様相と避難の様相が簡潔かつ明快に語られる。

コットン・マザー編『救世主の鉄槌』その一

コットン・マザー編『救世主の鉄槌 一七二七年十月二九日・三〇日の夜ニューイングランドを襲った地震の記録（稀有なる大地震の翌朝参集した住民に向けた特別礼拝での説教を含む。）』

序文 地震に関する釈解

一七二七年十月二九日から三〇日にかけてニューイングランドは、無風快晴に恵まれ、かつてなきまでの静穏な好天となった。しかし、午後十一時約十五分前ボストンでは都市の一端から他の一端へ石置の上を非常な速度で走る多数の馬車のごとく、凄まじい噪音が響き渡った。これに伴って世にも怖ろしい地震が勃発して、建物を揺るがし、屋内や戶外のさまざまな設備や事物を横転させた。だれもが予期せぬ異変であって、多くの住民が仰天する。最初の震動が最強であって、若干の間隔を挟む数次の余震にはやはり噪音が伴った。

余震の総数は不確かで、最小限四、五回は確認できる。最後の揺れは午前の五時から六時の間であった。

この地震がどれほどの地域にわたるか、いまだ不明であるが、確かな情報によれば、数十マイルに及ぶ。地震の脅威に加えて、大気には怖るべき火焰と閃光が併発した。沿岸の船舶もこの震動で揺れた。

驚倒した住民が翌朝辛うじて戸外へ出ると、オールド・ノース教会の牧師たちは鐘を打ち鳴らし、可能なかぎりただちに定例の礼拝に参集するよう促した。これらの牧師は住民とともに神に祈り、危機への天佑を懇願した。他の地域からも牧師が迅速かつ自発的に加わり、きわめて周到に協力する。集会への参加者は多数に及び、教会のもっとも広大な会場にも溢れる。真摯なる信者の衆会であって、きわめて敬虔なる全員が神への献身を誓い合った。

オールド・ノース教会での礼拝は午後二時頃に終了し、その一、二時間後他の地域でもいくつかの教会がその例に倣って沢山の会衆を集め、特別の宗教行事が夕宵八時頃まで続いた。これを盛大にしたのは、聖職者と住民の一致した熱意だけでなく、光栄にも総督閣下の推挙である。つねに敬虔であられる閣下は、今次礼拝を翌木曜日（各週講読の予定日）も続けるよう導かれ、当日をボストン全教会の祈願日と定められた。

一五八〇年イギリスで地震が発生し、大きな被害はなかったが、王権は即刻熱烈な祈禱を捧げ、地震の微候たる神の怒りを和らげるよう命じた。我らの指導者もそうした施策に立ち、民草も躊躇なくそれに従う。

朝の大集会で教役者のひとり、祈りとともに誓いを捧げるのが至当と判断した。さまざまな折に適切な

誓いを選んだ彼は、いまだ消えやらぬこの危機、大地震に際し崇高なる神の明快な声を伝えたのである。①

ニューイングランドでもっとも著名な聖職者のひとりコットン・マザーは、一六六三年ハーヴァード大学学長インクリーズ・マザーの長男としてボストンで出生した。年少にしてラテン語やヘブライ語に親しんだ彼は、十五歳でハーバード大学を卒業し、二五歳のときオールド・ノース教会の教役者に推挙された。以後終生そこで説教を続ける一方、祖父および父と同じくマサチューセッツの神権政治に深く関与する。また、文筆家として多数の著述を残し、とくに列伝的な大作『アメリカにおけるキリストの大いなる御業』は、初期アメリカ文学を代表するひとつと評価される。また、ベンジャミン・フランクリンはマザー著『善行論』を愛読し、その成果を小品「貧しいリチャードの暦」に摂取した。ちなみにフランクリンは一七二七年大地震の際二一歳の青年であり、ロンドンから帰国して、ボストンで印刷業を再開したばかりであった。なお、コットンは父インクリースとともに有名なセイラム魔女裁判を進めたため、今日ともすれば否定的評価を付せられるが、ニューイングランドにおける宗教と文学の分野で指導的役割を果たしたことは確かである。

マザーによるこの記録は、後日刊行された説教の序文として記述され、以後地震発生の証言としてしばしば引用される。この史料でとくに注目されるのは、震動に伴う噪音の記録であり、さらには被災者の精神的衝撃と教会における応急の対応であろう。オールド・ノース教会の中枢である彼も地震発生の特長では、高齡であり、演壇での教導は短簡であつたろう。後日刊行された記録の本編では、他の教役者による長文の説教が収録される。一七二七年の説教は異変の直後被災者みずからを会衆とするものであり、いま実感した地震の様相をその席であらためて説明する必要はなかった。マザーによる証言が序文として誌されたのと同じく、つぎの記録も説教集の序文および補遺として伝えられる。その執筆者はおなじくオールド・ノース教会の教役者トーマス・プリンス神父であつて、説教自体は震災第五日の十一月二日、断食と神恩感謝の日としてサウス教会において行われた。

① Cotton Mather, *The Terror of the Lord. Some account of the earthquake that shook New-England, in the night, between the 29 and the 30 of October. 1727.* pp.1-3. Evans Early American Imprint Collection, on-line.

プリンスの説教『神の御業にして聖なる怒りの顕示』その一

序 文

十月二九日主の祭日である晴朗で静穏な夜十時四十分頃に都市ボストンは、未曾有の激烈な地震に突如襲われた。それに伴つて煙突の猛火のごとき爆音が、凄まじく響き渡る。三十秒後大地が隆起し、動揺する。約一分震動はさらに強まり、とりわけ上階の家具、戸口、窓、壁が異常に軋り、家屋自体もぐらついて解体・倒壊するかに思われた。寝入りかけた住民は仰天して目覚め、他の多くも驚愕して街路へ逃れる。しかし、まもなく震動は鎮まり、三十秒後まったく止まった。

震動と轟音は北西の方向から来て、南東の方向へ去った。建物の揺れを感じ、脆い家具が壊れ、煙突先端の煉瓦も落下した。しかし、破壊された家屋はなく、傷ついた生きものもない。陽が昇るまでに遠くから

数度噪音が聞こえ、弱い揺れを感じられた。しかし、当地で地震が鎮まっても、当然人心はいつまでも深い不安に包まれた。

十一月十一日の朝かくも異常な事態への勤行としてノース教会で統一大祈禱会が催された。五日夕宵にはオールド・ノース教会とサウス教会で同じ趣旨の集会が企画され、いずれにも非常に多くの人々が参集した。また、総督の提議により同じ週の火曜日（十一月二日）が、ボストンの全教会で特別の断食と祈禱を行う日と定められた。

補 遺

一七二七年十一月二十日 トーマス・プリンス ①

この大地震は周辺の島々を含め、大陸全土にわたり、南はベンシルベニアのドラヴァーレ河から東はカスコ湾先のケンベックに達して、約五百マイルの範囲に及ぶ。そこには沿岸部だけでなく、軽度の地域もあるが、内陸部のイギリス植民地も含まれる。震動の経路はおおむね西北西と東南東であった。ボストンに較べ、西方の地域では数分早く、また東方の地域では数分遅く震動が感じられた。

フィラデルファではひとたび揺れたが、強くはなかったと記録される。ニューヨークとロングアイランドでは二度揺れ、ボストンとおなじくあとの震動がより強烈であった。コネティカット州のスタンフォードと

① Thomas Prince, *Earthquakes the Works of God and tokens of his just Displeasure*. Boston, 1727. pp.1-3.

ギルフォードにおいて十時から数分後に地震を感じて、鐘楼も響き、煙突が倒れた。ニューロンドンでは一棟の家屋が二フィートも地滑りした。グートマウスにおいてある教役者は戸外で轟音を聞き、それが北西から南東へ急速に移るのを感じた。ドルチェスターでも凄まじい轟音が響き、遠出していた数名はブルー・マウンテンの山崩れに発すると推論した。マーブルヘッド港からカスコ湾に向けて出航した船団は、最初の強い衝撃で小さな暗礁に阻まれたように感じ、海流の異変で船体の方向を変えた。なお、これらの地域では以後九日か十日の間に噪音がほぼ三十回発生する。

とはいえ、メリマック河畔の町々は一層深刻な様相を呈した。ハンプトンではまず噪音を聞き、閃光が窓辺に射し、地面を照らすや、震動は始まった。田野の獣類が驚愕して吼え走る。これまで凍ったこともない泉で、異常にも湯が沸き上がる。泉全体も深く沈下しており、元の高さへ戻すため、掘り上げる必要があった。やや寒くなった現在、そこには氷が張る。

ニューベリーにおいていくつかの地下室で壁が崩れる。一階の炉床がひとりの住民もろとも地下室へ落下した。また、三カ所で地割れが発生して、多量の土砂を噴出した。そのためある地点では土硫黄の灰に似た微小な砂が、荷車十六ないし二十台分も発散したとされる。ブラッドフォードでは深さ六フィートの井戸ふたつが、地震によって千上がり、泉もいくつか陥没した。

アンドヴァーの道路でも地面が隆起した。乾燥した土壌の地区が湿地帯となり、泥沼と化した道路の通行は危険となった。

両側の河岸に位置する町々では無数の障壁が倒れ、煙突の先端もいくつか墜落する。煉瓦造りの建物も多

プリンスによる説教序文には、地震の強さと破壊の激しさとともに、震動と噪音の様相が的確に記録される。また、補遺として綴られたニューイングランド各地の被災状況は詳細で広域にわたり、貴重な史料に数えられる。一六八七年マサチューセッツで生まれたトーマス・プリンスは、ハーバード大学を卒業したのち、西インド諸島、マデira諸島を旅行し、さらにイギリスで移民の史料を収集した。やがて帰国した彼は、一七一八年マザーと同じくオールド・ノース教会の教役者選ばれ、終生その地位を占める。大地震の翌年着手し、十年を費やした大作『ニューイングランドの年代記的歴史』が彼の代表作とされる。②

こうした地震史料は現代日本の私たちにかならず阪神・淡路大震災や東日本大震災を想起させるが、これらについてもキリスト教聖職者によって幾多の記録が遺されている。一九九五年神戸については献身的な救援活動が多く綴られるものの、地震の成因たる神の御業や民の背徳について述べた証言はすくない。そうしたなかで神父岩井健作の説教集『地の地震い動くー阪神淡路大震災と教会』がとくに注目される。『旧約聖書 イザヤ書』二四章の章句を文頭に掲げて、岩井神父は一月十七日の激震をその五日後神戸教会における説教でつぎのように語る。「暗闇の、深い地底から、地鳴りを立てて押し寄せ、噴き出してくる衝撃が、手足も、五臓六腑も、思考を

① Prince, *op.cit.*, pp.33-35.

② Thomas Prince (historian). *Wikipedia*. online.

も、一切の動きを金縛りに縛るつけるように、震度七の列震は、私たちの街を襲いました。」神戸教会は破壊を免れたが、幹線道路に位置し、緊急自動車の警笛が六日間昼夜響いた。「この週」と岩井神父は震災第三週の説教でさらに述べる。「教会の和室では、既報の故西谷節子さんの柩を囲んで前夜式・出棺をいたしました。そのあと、奥宣道兄のご尊父、独立伝道者奥幸郎牧師の柩を安置し、前夜式・出棺をいたしました。奥先生は、前から入院ご加療中の病死ですが、地震の前日、見舞われたお元氣なご親戚のご夫妻は、家屋倒壊の中、「お父さんがんばれ」との息子さんの声にもかかわらずおふたりとも亡くなられたことです。」中心部にある神戸栄光教会と下山手教会は会堂自体に甚大な被害を受けた。教団共済組合の任務として彼は十三の教会を巡察し、つぎのように報告する。「各教会はそれぞれの中で立ち上がり、礼拝し、諸教会との連帯を今までより、いっそう強めていくことをめざしています。さらに〈教会の復興は地域の再生なくしてはありえない〉との思いをもって、避難所に物を提供するなど、地域への働きをしています。それぞれの教会が震災後改めて、神の声を聞き、自らの宣教の責任を果たしていく自覚をもっています。私たちの教会も、まずはお互いの安否の情報をもとめました。相互に励まし合うとともに、住む家が全壊、半壊、全焼した方々のために手を伸べていく必要があるでしょう。」長田の焼跡に立って『旧約聖書 詩編』第百三十の章句〈もろもろの不義〉が神父の心に染みた。「戦後五〇年、日本はいろいろな虚飾をまとい繁栄してきました。」「その繁栄がもろもろの不義をふくんでいることにさえ

気がつかなかったということです。」^①

英国国教会を母体として、一八八七年に創設された日本聖公会は、十四年にわたりオンラインのホームページ、〈東北教区東日本大震災被災者支援プロジェクト〉において地震説教を含む幾多の資料を収録する。福島聖ステパノ教会の司祭渡部拓は二〇二一年三月十一日大震災十周年記念の説教で被災直後の体験をつぎのように回顧した。「十年前の三月十一日午後二時四六分。忘れもしないあの日に、わたしは先輩聖職とともに車に乗って、仙台の町を東に向かっておりました。そしてちょうど橋を渡ろうかとしていた時に、この大きな揺れがわたしたちを襲いました。体験したことの無い大きく長い揺れ、目の前では今まさに渡ろうとしていた橋が蛇のように波打っています。永遠に続くかとも思われた揺れが過ぎ去った後に、現実に戻されたわたしたちは、道がひび割れ、信号機は止まり、建物のガラスは粉々に砕け散っている町を引き返してきました。」その地福島県では震度六強の地震と津波で四千人以上が死亡し、福島第一原発の被災により十万人以上が避難を余儀なくされた。

「ともかく無事だった家族と再会して実家に戻り、水を川に汲みに行ったり、数少ない食料を求めてスーパーに並んだり、そして教会へと戻り、最初期に災害支援活動のお手伝いをしました。そんな怒濤のような日々が過ぎ去っていく中で、わたしは京都のウイリアムス神学館へと入学することとなりました。」震災一カ月後関西へ赴任すべく利用した夜行バスと新幹線の窓から地震の爪痕をほんやり眺める。「京都の神学館に到着すると同時に

① 岩井健作著『説教集 地の地震い動く時―阪神淡路大震災と教会』コイノニア社、二〇〇五年。一七一―八

二六、五二―五三、六〇―六四頁。

皆が心から出迎えてくれました。訪れる教会すべての場所で、そこに集う人々は遠く東日本で起こった惨状に対して、自分のことのように心を痛め、祈りを献げてくれたのです。」こうした同情はが彼には大きな救いとも新たな自覚ともなった。「改めて感じられたのがイエス様のみ業の確かさでもあったのです。遠く離れた地で、自分とはともすれば無関係だとその重荷を解いてしまっても仕方が無いような中で、少なくとも教会とそれに連なる活動の中においては、その祈りの中においては確かに人々はその悲しみや苦しみという重荷を担って祈っているということ。そしてそれは、今日の聖書にもあるように、イエス・キリストが一人では背負うことの出来ない重荷を、その人の軛を負いやすいようにしてください、そしてまたご一緒に担ってくださいっているからこそ実現しているのだということです。」^①

第二節 神の御業としての地震

ニュージーランドの聖職者がとくに信奉するジャン・カルヴァンは、宗教戦争のさなか徹文事件による弾圧強化を逃れ、バーゼルに滞在して一五三三年主著『キリスト教綱要』を書き終えた。やがて彼はジュネーヴにおいて神権政治を成就し、古典の教養と神学の研鑽を主体とするコレージュ・ド・カルヴァンを創設した。度重な

① 渡部拓「東日本大震災十周年の祈り―十年目に負う軛」日本聖公会〈東北教区東日本大震災被災者支援

プロジェクト〉。 <https://nskk-tohoku.com/support/preach/>

る加筆を経てラテン語とフランス語による同書最終版は一五六〇年に完成し、ドイツ語、イタリア語、スペイン語、チェコ語等に翻訳されるとともに、ジュネーヴのコレージュへは各国の青年が集まった。一五六一年『キリスト教綱要』の英訳を最初に果たしたトーマス・ノートンは、イギリス宗教改革の指導者にしてプロテスタント迫害の殉教者トマス・克蘭マーの姪婿である。

ピューリタンの聖典『キリスト教綱要』第一巻には、まず世界の創造と統御が語られる。「神は世界をみずから創造され、そこでの万物を摂理により統御され維持される。」世界の始原を超越者に帰することは、異教の民においても見出されるが、神はたんにこれを創造したのではない。「神は世界の創造者であるのみならず、その永遠なる統御者にして守護者と仰がねばならぬ。すなわち、宇宙の機構と天体の全要素を導かれるだけでなく、あらゆる生きものを小鳥に至るまで活かし、養い、恵み給う。かくしてダヴィデは言う。世界はエホバによって創造され、以後絶えざる秩序のもとに統御される、と。『詩編』第三章」「あらゆる被造物のうち太陽ほど貴重で驚異的な活力を示すものはない。なんと偉大な力によって世界を照らし、さらに熱気であらゆる生きものを生育させ、陽光で豊饒な大地に種子を発芽させる。かくして植物を美しい緑に染め、たえず養分を補給して大麦など穀物の穂を実らせる。」かかる神の摂理に導かれることは、社会の様相や人生の行路についても同様である。「もしもだれかが盗賊の罠に落ちるか、野獣に出会うならば、あるいはだれかが海上で嵐に襲われるか、家屋や樹木の崩れで圧死するならば、さらには砂漠を彷徨う人が飢えを凌ぐ糧を見つけ、大海に投げ出された人が港へ打ち上げられ、奇蹟的に死を免れたとすれば、こうした出来事を俗間では運不運に帰する。しかし、キリストの言葉、〈汝らの頭髮まで数えぬ〉に教えられる人々は、みな一層深い成因を認め、これら人生の転変がすべて神

の秘かな御意で統御されると確信する。『マタイ伝』第十章三十」①

ピューリタン聖職者の地震説教は、こうした神学的世界観を基調とし、地震の成因、地震による警告、罪過と改悔、劫罰の事例、さらには自然学的観察などの諸項目よりおおむね構成されるが、各々の力点や精粗に関して微妙に相違する。ここではまず地震の成因説明、すなわち地震が神の御業にして劫罰であるとの立論をめぐり、大地震の三日後ブルックリンでなされた教役者アリンの細説を検討したい。

アリンの説教『雷鳴と地震』その一

ブルックリン福音教会教役者ジェイムズ・アリン

「雷鳴と地震 改悔への畏怖すべき歴然たる摂理」一七二七年十月二九日夜の地震に際し、十一月一日ブルックリンで営まれた斎日の説教

『イザヤ書』第二十九章六

① Jehan Calvin, Institution de la Religion Chrestienne, Paris, 1859, Tome I, pp.96-98.

〔参照〕ジャン・カルヴァン著、渡辺信夫訳『キリスト教綱要』新教出版社、一九六三年。

（ダビデが宮を構えた都よ）万軍の主エホバは雷、地震、轟音、旋風、暴風
および猛火をもって臨まれる。

右記の章句をよめば、この晩夏私どもに向けられた畏怖すべき摂理、なかでも主の晝日夕宵に数次発生した地震を無論ただちに思い浮かべるであろう。

全能なる神が正義を啓示されるため、脅威を敷かれたのである。主の強大さが示されたいま、私どものはみずからを猛省し、生きものすべての総力をも超える神業を畏怖し、奉祀せねばならぬ。

かかる摂理を意に介せず、無視するならば、主の激怒を招き、『詩編』第二十八章五で唱われる破滅的審判に曝されるであろう。すなわち、「彼らは主のもろもろのみわざと、み手のわざとを顧みないゆえに、主は彼らを倒して、再び建てられることはない。」ここに参集した皆様すべてが、かかる叱責と恐怖を免れるべく、このたび明示された異常な御業を深刻に受け止めるよう切望する。摂理への畏怖が私どもの心に刻まれることを、主が永遠に記憶されるよう願うとともに、地震当夜の動転、これが破滅の淵と観念し、最期の際と感じた衝撃がいつまでも消えぬこと、まただれもがかつての罪深き人生に戻らず、以前と同等か、一層哀れな人間とならぬよう望む。

予言者イザヤがアリエル（エルサレム）について予言した怖るべき審判は、比喩に止まらず、近々わが国にも下され、だれもが改悛と革新に目覚め、過去の罪過を悔い改め、未来の不品行を防ぐべきである。悪業の極みから逃れ、

世塵を免れて神の前にひれ伏すがよい。かくして摂理に沿う帰結であって、私どもの救いとなる。

しかし、全能の神を無視して罪過を続け、苦しみも悩みも悲しみもなしに再三警告に従わぬならば、私どもも粗末な塵埃に変えられ、王都エルサレム、神の民が住むアリエルにおけると同様、この世から消え去るであろう。激しい不興にあられても、神は救いの手を伸べられる。それゆえ、悔悟する民をおそらく神は罪人とはみなされぬ。罪が深ければふかいほど、その悔恨も深刻なはずである。救世主を仰ぐアリエルの信仰は当地の誉誉と安寧へと繋がり、この地を侵略する軍勢は風前の灯火に等しい。だが、神の愛顧と守護を失えば、あらゆる種類の災厄を招く。①

この説教においてアリンはまず『イザヤ書』を引証し、地震が神意により惹起され、罪深き民への警告であると論じる。この經典は『イザヤ書』は『旧約聖書』三大預言書のひとつとされ、人間の傲慢に対する神の裁きが主題である。イスラエルの地、ユダ王国において偶像崇拜へ傾き、他民族に屈従する王都エルサレム、別名アリエルへエホバの神は、劫罰として戦乱と地震を呼び起した。説教における典拠引用はおおむね短簡であるため、あらためて欽定聖書『イザヤ書』を参照する。因みに欽定聖書は一六一一年ジェームズ二世の命により英文で大成され、ニューイングランドでも広く用いられた。「ああアリエルよ、アリエルよ！ああダビデの宮を構えた都よ！年に年を加へ、季節まはり来れば、われアリエルを悩まし、これを悲しみと嘆きで包もう。われ汝らのまはりに宮を構へ、砦を築きて囲み、櫓を建てて攻めよう。かくて汝らは低く屈せられ、地に伏して物言ひ、塵のな

かより低き声出して語る。汝らの声は地の霊のように聞こえ、汝らの言葉が塵のなかよりさえざる。なおまた、汝らの外敵は砂嵐のごとく突如襲おう。このとき万軍の主エホバ、雷鳴とともに急遽臨まれ、地震、轟音、疾風、暴風、さらには燃えさかる火焰をもって戦い給う。アリエルに敵対するすべての民族、国土と軍備を攻撃して汝らを困窮させる勢力も、かくして夜の幻のごとく消える。『イザヤ書』第二十九章一―八。①そして、ダビデ王の治世に隆盛に達し、ユダ王国の首都として継承されたアリエル、すなわちエルサレムにおいて豪奢と背徳が蔓延することを、預言者イザヤは痛嘆する。「彼らの国には金銀が充ち、財宝の数は限りない。彼らの国には馬が溢れ、戦車も数限りがない。彼ら国では偶像が満ち、各自の手指で製作したものを崇拜する。また、下層の者が蔑視され、立派な人物も屈辱を受ける。これを許してはならぬ。主エホバの御姿と栄光が現れるとき、これを畏れて汝らは岩間に入り、砂塵に土にかくれよ。この日彼らの慢心は挫かれ、彼らの尊大も倒されて、エホバのみ高く輝く。」②

ニューイングランド地震に際する幾多の地震説教は、イギリスの教役者トマス・ドーリッテルから影響を受けたとされる。一六九二年ロンドンを始め各地で地震が発生し、その翌年ビュリタンたる彼は『地震の解明と改

① The Book of the Prophet Isaiah, *The Holy Bible* (King James Version), London, 1611. Oxford-reprint p.743.

② *Ibid.*, pp.722-723.

俊の実践』を執筆した。①「悪疫と大火と地震は」とその冒頭で彼は述べる。「偉大にして崇高なる神が、断罪されるもつとも畏怖すべき裁きであって、主が罪深き民に不興を抱かれ、唾棄すべき邪悪な過ちを怒り嫌われるからである。これら三種の裁きがロンドンに下された。第一の一六六五年における死の疫病である。第二は一六六六年の大火にほかならぬ。そして、最後がこれなる一六九二年の地震である。」これらを司るのは、神に統御される宇宙の理法にほかならぬ。「ときには我らの頭上なる天上において、ときには我らの脚下なる地底において神の創造は驚異的であって、すべての民が完璧なる御業に驚嘆するばかりである。」太陽が動き沈むのも聖なる摂理により「さらに地球をも統御して、地を動かし、揺がし給う。」さらにドーリッテルは、『聖書』を引用し、地震が罪深き民への劫罰であると説くた。「地震ないし大地の変動は、諸国や国家や教会への大いなる衝撃あるいは警告、邪悪にして従わぬ輩への天罰と、ときには形而上学的に解釈される。〈万軍のエホバ彼らに臨み給う。雷と地震と大いなる音響と、暴風と旋風と焼きつくす火焰とをもて〉『イザヤ書』第二十九章六。これこそイスラエルへ向けた神の怒りが象徴的に表現されたものであって、この国を破滅させるべく、天と地の参戦まで悟らせる。」「人々が結合し統治される共同体がこうした地震によって、破壊され転変し、村落のごとく一変する。強固な城砦と信じた諸州や王国が、田舎小屋のごとき住処に変わるのである。」②

① Maxine Van de Weirin, *Morling in Puritan Natural Science : Mysteriousness in Earthquake Sermons. Journal of the History of Ideas*, Vol. 43, No. 3. (Jul.-Sep. 1982) pp.421-424.

② Thomas Doolittle, *Earthquakes Explained an practically Improved*, London, 1683. preface, pp.2, 7.28-30.

アリンの説教『雷鳴と地震』その二

地震が意志なき偶事に起因するとの理論、またはそれが神聖な統御に欠ける自然学的要因から起こるとの推論は、不合理で無神論的である。神は世界をなんら支配せず、統御の方策たる賞罰もありえず、主の力能と裁きがきわめて厳肅かつ歴然と發揮される事例も認めえないと、この推論では主張される。

恵み深き救世主は人生のもっとも些細で日常的な事柄においても神と摂理を認識するよう導いた。都市や一国に悪業が拡がるときも、これを阻止する主の御業と見なさねばならぬ。

ある種の地震は神から直接に発し、他種の地震は二次的成因の作用で起きる。福音書では双方が区別なく神の御業と記述されが、ここに敷衍してみよう。

一、しばしば地震は洪業として神から直接生じ、自然の経路と度量を超えて発現する。これなる作用によって副次的な条件が発動し、摂理に添う革新に寄与するのである。

かくして立法者モーゼが山岳に到り、律法を定めたとき、シナイ半島で起きた地震は超自然の洪業であった。それは奇蹟の日であり、その壮大さと厳肅さにおいてすべてが類稀であった。『出エジプト記』第九章『詩編』第一一四章でも畏怖すべき出来事が詠われる。「イスラエルの民がエジプトを去るとき、海は退き、ヨルダン川は逆流し、山は牡羊のように、丘は子羊のように動いた。海よ、なぜ逃げるのか。」この問いこそ奇蹟が実在し、なんら自然的現象でないことを伝える。激しい地震によって使徒パウロとシラス

が獄舎から脱出し、獄吏を改宗させた史実も、勿論異常な出来事であって、使命を達成すべく神より発したものである。『使徒行伝』第十六章 救世主の死と復活に際して起きた数次の地震が、奇蹟に属することを否定する者はいない。『マタイ伝』第二十七章および第二十八章 そうした時点における日食も自然現象ではありえない。慄然たる事実に対する神の怒りを示し、かくも無惨に扱われた人物が、人間を超える存在であることを、愚かな民に教えるためである。

ユダの王ウジヤが神殿へ侵入したとき、エルサレムで起きた地震も神直々の審判であった。『アモス書』第一章 ヨセフスによれば、香を供える最中に寺院が破壊され、亀裂を陽光が照らし、ウジヤ王の身体全体にハンセン病が拡がった。それとともに山岳の片側が破壊され、王宮の庭へと崩れ落ちた。『歴代志下』第二十六章 神はときに地震をもって民に警告や劫罰を与えると、以上の史実から推論できよう。

二、地震は副次的成因によっても惹き起こされる。

地球の偉大な創造者は永遠なる構想を各部分へ恵み深く分与され、天上の基本的世界にはそれを推進する徳義と能力を授けられた。かく定められた自然の法則を逐一指図するわけではないが、神はつねに支配される。それゆえ大地の果実を太陽と月の作用に産出せしめる。かくして神は昼と夜を適切にも交互に切り替えさせ、黄道帯の各地点を太陽に通過させて四季を実現する。

とはいえ、地震の自然的成因については最高の英知と洞察を有する人物も、なお推測するのみである。これについてはさまざまな憶測が乱立し、甲論乙駁を繰り返すにすぎぬ。

古代の異教徒は地中の空洞における水の変動を地震の成因と信じ、それを司る海神ネプチューンを祀った。これにはなんら確固たる根拠がない。

風が大地の内部に閉じ込められ、出口を求めて激烈に発散し、地震に至る、と論じる人たちもいる。これへの反論も容易であろう。風が迅速に地中を通過し、数分にして五百マイル先の地を揺がす自然現象はまったくありえない。なぜなら、きわめて強い突風よりも急速に大気を貫く大砲の発射すら、一分間に一リグルスしか飛ばぬからである。この算定によれば五百マイル先へ到るには、ほぼ三時間を要すが、今次震動を感じた時差は、フィラデルファとアロウシックとの間で一時間余りであった。

真理にもっとも近いと私が思う理論は以下のごとくである。大地において硫黄、硝石、胆礬^{たんぱん}など可燃性物質の燃焼で生じる地中の火焰こそかかる驚異の成因にはかならぬ。この火焰は電光と同じ物質から成り、電光と同じく信じられぬ速度で飛ぶとともに、抗し難い力を備え、このたび私どもを襲ったとおり大地の激烈な衝撃を与える。この理論によって問題が解決するか否か、ここでは敢えて語らず、それを探究する任務を然るべき方々に委ねたいと思う。

しかしながら、かくして自然的成因を受け入れたとしても、すべては神の手中に存し、終始神の意志に従っている。神がそれらの統御を放棄され、自力での作用を許されると考へてはならぬ！それによって世界が野蛮な無秩序と混乱に覆われてよいのか。否！神は自然に教示と指導を授け、制約と限界を課して、聖なる構想に加わり、その完遂に寄与する自由のみを与える。したがって、私どもが享受する善も、私どもを苦しめる悪も、すべては神に帰せられる。主こそあらゆる自然現象を真に統御するのでなければ、聖なる審判に寛恕を乞い、聖なる祝福を祈念する根拠がどこに存するであろうか。また、私どもがさまざまな危険から守護され、みずからの利益となるあらゆる事柄をなし得るよう主に頼る根拠がどこにあるか。それゆえ、一切の事象を自然的成因に帰するのは神への冒瀆であって、この世から宗教の一切を抹消する直接の方途、それには固執するなにも免れぬ致命的結末にほかならぬ。かかる原理が真であるならば、主の約束は欺瞞と妄想にすぎず、脅威を数くとの滑稽な警告も顧慮するに値しない。かかる主張に捉えられた人々にとって、神による約束の履行や脅威の完遂など笑止の沙汰であり、果しえない営為である。①

コットン・マザーの父インクリース・マザーは、一六六四年から約六十年間オールド・ノース教会教役者の職務にあり、ハーバード大学の学長をも兼ねて、宗教界の指導的地位にあった。一七〇五年の六月十六日と二二日ニューイングランドにおいて四三年ぶりに相当の地震が発生する。イギリスの聖職者ドーリットルの業績をかねてポストンで紹介する彼は、このときみずからも「ニューイングランドで発生する地震」と題して説教した。②教役者アリンのそれをはじめ、二二年後になされたあまた地震説教の原型が、ここに見出される。『新約聖書ルカ伝』第二章の言葉「各地に大地震、飢饉、疫病来らむ。また、そこに怖るべき異変と偉大なる啓示現わす。」これを巻頭に掲げて一七〇五年にインクリースは立論する。「地震は神の御業である。神の摂理なしにはなにも生じえない。キリストは使徒に申された。〈神の心なしには、一羽の雀も地に墜ちることなし〉『マタイ伝』第十章二九。されば地震ほど巨大な事柄は摂理なしに起こりえぬ、と我らは確信する。大地はみずから震動でき

① Allin, *Thunder and Earthquake*, pp.17-22.

② Cotton Mather, *The Terror of the Lord*, Appendix, p.4.
Wetern, *op.cit.*, pp.421-422.

ない。全人類の力をもつてしても、地震を発生させるのは不可能である。だが、地球を創造された神は、いかなるところいかなるときでも大地を震動させ給う。〈神その地を震わせば、柱揺らぐ。〉『ヨブ記』第九章六。』インクリースによれば、こうした地震の発生は人間に対する聖なる警告にほかならぬ。「総じて地震は人間が罪を犯し、神が怒り給う証左である。罪を犯さなければ、人間が地震に襲われることはないであろう。したがって、世の掟を神が禁じられるとき、地震が発生した。法を逸脱する人々へ神が激怒されるのである。〈山々揺らぎ、峰々崩ぶる。地噴き上がる。たれかその怒りに耐えうらむ。〉『ナホム書』第一章五および六。』①

関東大震災に直面した大正期クリスチャン、内村鑑三、植村正久、賀川豊彦などの対応はよく知られている。なかでも内村はかねて近代日本の富国強兵や文化の頹廃を批判し、大地震に際していわゆる天誅論を開陳した。みづから主宰する雑誌『聖書之研究』一九二三年十月号に「末日の模型、新日本建設の絶好の機会」と題する論説を掲げ、その冒頭に『ペテロ後書』第三章の章句を据える。「神の日には天燃え毀れ、体質焚鎔けん。然れど我等は神の約束に由よりて新しき天と新しき地とを望み待てり、義はそのなかに在り。」ついで内村は震災の様相と首都天誅の摂理について述べる。「大なる災害は我東京並に其付近の地を襲うた、何十万と云ふ人が死し、何十万と云う人が傷つき、何十万軒と云う家が焼け、多分何十億と云う富が失せたであろう。実に悲惨の極、酸鼻の極、これを言語に尽すことは出来ない。」人間が何百年かかつて造った大都會を、天は一日にして壊滅させ

① Increase Mather, *A Discourse concerning Earthquakes, Occasioned by the earthquakes which were in New-England*.

Boston, 1706, pp.3, 5, 11. Evans Early American Imprint Collection. online.

た。「日本国の華を鍾めたる東京市は滅びた。然し何が滅びたのである乎。帝国劇場が滅びた。三越呉服店が滅びた。白木屋、松屋、伊藤呉服店が滅びた。御木本の真珠店が滅びた。天賞堂、大勝堂等の装飾店が滅びた。実に惜しい事である。然し乍ら若し試に天の使者が、大震災の前日、即ち八月三十一日の夕暮、新橋から上野まで、審判の剣を掲げて、通過したと仮定するならば、彼はこの家こそ実に天国建設の為に必要欠くべからざる者であると認めたものを発見したであろう乎。私は一軒も無かつたであろうと思う。」「人生が遊戲でないかぎり、正義の実現が万物存在の理由である限り私共は神が此虚栄の街を滅し給いたればとて、残酷無慈悲を以て彼を責むる事はできない。単に新聞雑誌に現はれたる震災以前の東京市の状態を考へても、此災害が之に臨みしは誠に止むを得ないと言わざるを得ない。」とはいえ、これが世の終末ではなく、神は恩恵贖罪の道を備える、と内村は信じる。「即ち潔き行を為し、神を敬ひて神の日の来るを待つべきである。」「滅亡は度々人類に臨む。然し滅亡の為の滅亡ではない。潔めの為の滅亡である。救いの為の滅亡である。世の終末と聞けば恐ろしくあるが、終末ではない。新天地の開始である。それと同じく今回の此災害も亦此目的を以て臨んだのである。之に由て東京と日本が亡びるのではない。より善き、より義しきより潔き東京と日本が現れんとして居るのである。」①

ニューイングランドの名門校、アマースト大学の教授ウィリアム・スミス・クラークは一八七六年日本政府の

① 内村鑑三「末日の模型」新日本建設の絶好の機会『聖書之研究』大正十二年（一九二三年）十月号、五一八頁。

招聘により札幌農学校教頭として着任した。日本での教鞭は九ヵ月に止まったが、その間に内村鑑三はキリスト教への関心に目覚め、〈イエスを信ずる者の誓約〉に署名して洗礼を受ける。① 一八八三年私費留学生として渡米した彼は、翌年マサチューセッツにおいてアマースト・カレッジへ編入された。「是非とも私はニューイングランドへ来るつもりであった。私のキリスト教がニューイングランド伝来のものだからである。」クラークから紹介された同校の校長ジュリウス・シーリから、生活と勉学の便宜を与えられ、「尊敬すべき校長ご自身から多大の恩恵と感化を受けた。」ひとりの老教授からは彼ひとりを対象に旧約聖書などの特別講義を受け、校長に導かれて大規模な伝道集会にも参加する。「〈予定説〉の教義を学び、」とカルヴァンについて六月三日の日記に誌される。「その神髄に深い感銘を受ける。さまざまな誘惑が消え去り、わが胸の高貴な資質が散し、感激で燃え立つ。」②

第三節 背徳への鉄槌と改悛への督励

一六三〇年六月リンカンシャー地方の非服従派ビュリタンは、ジョン・ウインスロップを指導者とし、ニュ

① 関根清三著『内村鑑三―その聖書読解と危機の時代』筑摩書房、二〇一九年。四七―五〇頁

② Kanzo Uchimura, *How I became a Christian : Out of my Diary*, Tokyo, 1922. pp.130, 132-135, 141.

ーイングランドのセイラムへ出航した。モーゼに率られたイスラエルの民がエジプトでの苦難から脱し、神に約束された地、乳と蜜の流れるカナンで理想郷を築いた故事に倣ったのである。大西洋横断の船上でウインスロップは六月十二日名高い説教「キリスト教慈愛の模範」を行った。「この壮途にあたり我らは」と彼は一行の決意を表明する。「神に誓約を捧げた。神が我らに委託されたのである。主の導きによって我らは盟約を結び、その厳守を誓い合って、聖なる愛顧と祝福を祈った。主がこれを喜悅され、約束の地に無事送り給うならば、我らは誓約の確認と委託への感謝を奏上し、これに基づく盟約の遵守に努める覚悟である。とはいえ、それらの履行を等閑にして、当初の目的に背くならば、また神を欺いて現世に執着し、官能的な営みに耽り、己れと子孫の繁栄のみを求めるならば、かならず主は我らを激怒されて罪深き民へ復讐され、誓約の背離に鉄槌を下されるであろう。こうした破滅を回避し、子孫を護れる方途は、予言者ミカが教えるように、正義を貫き、慈悲を尚び、神とともに謙虚に歩むほかない。それゆえ私どもはこれなる壮挙のため一体となって団結すべきである。各々は兄弟の愛情をもって扶助し、他者の必要を充たすべく、己れの余力を快く割かねばならぬ。柔和、親切、忍耐、寛容の精神により相互の緊密な関係を維持すべきであろう。また、他者の喜びをわが喜びとし、他者の苦況をわが苦況として、ともに楽しみ、ともに嘆き、ともに労苦しつつ、成因たる共同体とその使命をたえず念頭に浮かべるべきである。」こうしてウインスロップはプロテスタントの信仰に基づき、正義と博愛を原理として模範的な植民地を建設するよう提起する。「神が我らに称讃と榮譽を授けられ、今後植民地開拓を志す人たちが、〈主よ、ニューイングランドにされたごとく導き給え！〉と祈ることを願う。なぜなら、我らは丘の上の街を築かねばならむ。あらゆる民族の目が我らに注がれる。船出したこの壮挙で主への誓約を偽り、神護が中止されれば、我らは全世界から嘲笑される。」船上におけるこの歴史的な説教は、『旧約聖書 申命記』第三十章におけるモーゼへ

の言葉によって閉じる。「神エホバ往きて得るところの地にて汝らを祝福し給うべし。されどもし心を翻して聴き従わず、誘われて他の神々を拝み仕えれば、汝らはかならず滅びむ。」①

ビュリタンの理想を実現すべく、ウインスロップらによって神権政治が敷かれて約百年後、ニューヨークランドで大規模な大地震が発生した。コットン・マザーの主導で急扨宮まれた説教は、その精神的衝撃から語られる。

コットン・マザー編『救世主の鉄槌』その二

大地震翌朝ボストン住民への説教

オールド・ノース教会教役者による
一七二七年十月三十日

莊嚴なる神がシオンの山より大喝された！我らは昨夜凄まじき轟音に驚き、その怖るべき統発にだれもが極度の戦慄に襲われた。ここに居られる方々よ、大地が左右ではなく、地底から上下に揺れるのを感じたのではない。轟音を耳にして、聖なる声かとわが唇が震え、懲罰の日にどうすべきか、わが身は震えた。主を怖れて我らも慄然とし、聖なる裁きに戦慄すると、みな申されるのではないか。獅子も吼えた。ここで震

① John Winthrop, *A Model of Chistian Charity*, Boston, 1836, pp.46-48. Hanover Historical Texts Collection, online.

えず、怖れぬ者は獣類よりも劣る。

数時間まえのごとき夜が、都市ボストンでは九七年の星霜になかった。深夜を悲鳴が貫く。朝になっても恐慌状態は止まぬ。陣痛する産婦のような苦悶が、多くの男女を捉えた。

激しい地震の衝撃は三回以上繰り返した。さらにいつ襲うか、いかなる懲罰が待ち受けるであろうか。

近年の忘れ得ぬシチリア大地震でも当初は住民を驚かすに止まったが、その二日後発生した震動で甚大な被害が生じ、死者は二五万人に達した。

我らが耳にした地震の大喝は、予言者に語られる古代都市でも与えられた。『ホセア書』第十章を見よ。

これこそ神を求める絶好の機会である。地震に襲われたカトリックの哀れな偶像崇拜者は、はかない虚栄と誤った信仰を強めつつあるが、それらは頼りにならぬ。喚く彼らが、救われることはない。これら不幸な民がそうした方途を固執する一方、唯一の神、エホヴァーイエスに祈りつつ我らは進む。我らの暗礁は彼らのそれとは異なる。我らは救世主に護られている。大地が震動し、山々が揺れるとき、主は然るべき避難と艱苦の克服を加護し給う。『詩編』第八章を読解したい。①

マザー一族は植民地マサチューセッツの創建に尽力した功績で知られる。コットンの祖父である牧師リチャード・マザーはリバプールで名声を得たのち、一六三五年五月清教徒の新大陸移住に加わり、家族とともにブリ

ストルでジェイムズ号に乗船する。やがてニューイングランドに近づくと、激烈なハリケーンに襲われ、一行百余名は奇蹟的に無事ボストンに到着した。やがて彼はブリマウスはじめ各地で布教に努め、ニューイングランド会衆派の指導者となった。入植三年後に生まれたその息子イングリズは、アイルランドのトリニティ・カレッジへ留学し、当地の教会に勤めたあと、ボストンへ帰国して一六六一年ノース教会主任司祭に就任する。マサチューセッツの行政組織にも深く係わり、英国本土の激動する政治情勢のなかで植民地の独立性を擁護し、一六九二年からハーバード・カレッジの学長をも兼務した。その子息コットン・マザーは一六八五年ノース教会副主任司祭に選ばれ、以後一七二三年にイングリズが歿するまでマザー父子は同教会の中枢を占めた。①

マサチューセッツで理想郷の建設が開始された一六三〇年、四千六百であったニューイングランドの人口は、一七〇〇年に二五万一千、一七二〇年には四六万六千と激増する。なかでも、ボストンはヨーロッパ等からの主要な輸入港であるとともに、早くから食品や衣料の生産が開発される。② プロテスタンティズムが勤労の意欲と資本の蓄積を促進したのは事実であろうが、こうした産業の発展と消費の拡大が、禁欲的な倫理を弛緩させたことも確かと思われる。

大地震の勃発にいち早く危機管理を主導したコットン・マザーは、かねてこの地における信仰心の減退と布教

① Kenneth B. Murdock, *Increase Mather : The Foremost American Puritan*, Cambridge, 1925. pp.33-34, 60-61, 71.

② 岡田康男編『アメリカ地域発展史』有斐閣、一九八八年。三六、四三頁。

中村勝巳著『アメリカ資本主義の成立』日本評論社、一七六六年。八一―八四頁。

活動の不振を慨嘆していた。一七〇二年に完成した代表作『マグナリア・クリステイ・アメリカナーニューイングランド聖職者の歴史』第三巻序文において彼は述べる。「我らの教会に怖るべき頹廢が、急速に浸透したことを余は痛感する。もつとも重要な信仰とともに、もつとも大切な愛の大きな基盤を失う危険、我ら植民地の主たる目的である教会秩序の中核を放棄する危険が徐々に増大しつつある。いまだ未開の土地にイギリスから神が運ばれた最初の種子に繁栄と福祉が蔵されたのに、我らあらゆる階層で明らかにそれらは減退した。近年ヨーロッパでジャンセニズムの台頭もあってカトリックが盛り返して、プロテスタントが劣勢にあり、ペラギウス主義やソツツイーニ主義などの反逆まで許すのも意外ではない。」ピューリタンの理念で築かれたマサチューセッツ草創期を理想とするコトンは、ウインスロップなど開拓者多数の列伝を綴り、彼らの高潔で博愛的な生涯を模範に供した。「ニューイングランドの父祖について虚構も粉飾も交えず伝えるに際し、彼らの生涯を明確に叙述することが、子孫への親愛なる助言として大いに役立つよう余は祈念する。故人の腕に痛烈な一撃こそ、いまや冒された難病への療法なのである。」①

罪深き新大陸住民への鉄槌は、多彩な才能と経歴を有する聖職者ジョン・バーナードによって、一層仔細に説

① Cotton Mather, *Magnalia Christi Americana or the ecclesiastical History of New-England*, London, 1702. Book III, pp.1, 11.

〔参照〕薙澤 梓「ピューリタンの共同体」としての十七世紀ニュー・イングランド社会」新潟大学人文学部編『人文科学研究』第一一八輯（二〇〇六年）

明された。つぎの地震説教は大地震の四日後マサチューセッツ湾の港町マーブルベッドで行われた。この説教は彼の教会記録『若人へのふたつの講話とひとつの説教―一七二七年十月二九日の地震に際して』に含まれる。

バーナードの説教「神の統御し給う地震」その一

マーブルベッド教会牧師 ジョン・バーナード

一七二七年十一月二日マーブルヘッド講話室

願わくは我らが衷心より悔悟し、周囲のあらゆる事柄を改めることを！聖なる審判が下された原因はなにか。我らの罪過に神は激怒されたのである。これなる審判に命ぜられるのはなにか。悔悟、悔悟！そなたらすべての悔悟のみである。予言者イザヤがユダヤの民を非難し、神の裁きをつぎのように告げる。（『イザヤ書』第二十七章九）「これによってヤコブの不正は洗い浄められ、実る果実により罪が除かれる」かくも親しく神が我らに裁きを下されたとき、だれもが真にみずからを改悔し、不正が我らの破滅とならぬことを期待されたのである。いまこそ我らすべてが生きたを変革し、悪しき生活を改めようではないか。畏怖すべき審判の前に立たされるそなたらの顔にこれまでの罪過が刻まれるの自覚し、聖なる報復が頭上に下されぬべく、種々の悪事を身から真摯に払い除けよ。この国で、またこの町でとくに憂慮すべき罪過をいくつかここで率直に挙げてみよう。

第一には、我らの周辺ほど不正との叫びが数多いところがあるうか。大抵の人々、高位の聖職者すら世俗的な才覚に染まる現実が明白ではないか。公法に触れぬことなら彼らはなにごともしかねない。己れが肥え太るための掴み取り、横取り、押しつけ、詐欺、詐取、欺し合いである。目方のごまかし、寸法のごまかし、品物のごまかし。ほとんどいつでもどこでも我らの周りには！かくしてだれしも自己の損得だけを案じ、隣人の利益や便宜を考慮せぬ。情けはひとのためならず、との金言に沿うひとは少数が皆無である。適くこれが現状であるからには、万人が徹底的にまずこれを改めねばならぬ。

第二には、我らの間ほど深酒が蔓延するところがあるうか。これこそ神の裁きで厳しく禁じられたもので、『イザヤ書』第二十八章にはつぎのとおり誌される、「エフライムの酔漢よ！」「彼ら酒によってよろめき、深酒によって道を誤る。」「その食卓はすべて嘔吐で覆われ、清きところなし」ああ、隠すすべもない。異常なまでの深酒と酒乱が、この国とこの都市で犯される深刻な罪過である。酒房の増大、強い酒の啞然とする消費量、酔漢の千鳥足や戯言、さらには激情による暴力沙汰など目に余る証左は多い。我らがよろめき、千鳥足となると、神は大地を揺さぶり、転覆させ給う。みずからの人生と魂を愛するならば、即刻改めるようそなたらに懇請する。

第三には、忌むべき不倫は我らのなかに潜みはしないか。『イザヤ書』第二十九章十五に曰く。「彼ら闇において行なうて言う。だれが我を見、我に気づくか、と。」かかる秘かな不倫は闇のなかで行われる。我ら自身を反省しよう。多くの事例が我らの間で増すばかりではないか。近親相姦はなかったのか。姦通はどうか。結婚以前に親しくした別の人があるのも、若者にとって普通ではないか。こうした不倫はこの都市をもこの国をも汚染し、これに赫怒される神は、我らを放逐される。願わくば、摂理による警鐘を心に刻み、かかる仕業がこの地で根絶するように！

最後には、これなる民の公然たる流神についてどうか。『イザヤ書』第二章二三ではユダ族に蔓延する邪惡について語られる。「わが名を聖としてヤコブの神を崇敬し、イスラエルの神を怖れよ。」彼らは神の御名を聖とせぬのみならず、それを冒瀆したのである。我らの間で主への呪いや悪口が日常の言葉となり、神の御名をいかに凄まじく汚していることか。主の祭日にすらいかに多くの人たちが、夕べの遊技や慰安において聖なる安息日を冒瀆していることか。確言できる事実を誌そう。主の祭日にあたる先の夕べには、流神の風潮がとくに目立ち、多数の人が自宅でも他所でも罪過に耽り、その最中に神の怖ろしき審判が下され、彼らと彼らの建物が地震に襲われた。主の祭日における冒瀆はまさに忌まわしい罪過である。そなたらが安息日を敬虔に過ごさぬために、主はその日を夏のごとく暑くし、艱苦を授けられた。このような邪道が反省されて、各自の営為が改革され、だれしも真摯に生きることが、衷心よりそなたらに懇請する。①

指物大工の息子として一六八一年ボストンに生まれたジョン・バーナードは、ニューイングランドにおけるもっとも多才な聖職者のひとりである。言語と数学に秀でた学者、航海と造船の達人であるとともに、文学と音楽にも精通した。また、建築家として目抜きの木造歩道を建造し、ハッチンソン大尉倉庫やビッツ船長喫茶館を建

① John Barnard, *Earthquakes under the Divine Government, a Sermon preached November 2. 1727 at the Lecture in Marblehead after terrible Earthquake.* . pp.91-94. in Barnard, *Two Discourses adressed to Young Persons* :

To which is added a Sermon occasioned by the Earthquake which was October 29 1727. Boston. 1727.

築する。マザー父子の恩顧を受け、コールマン神父と親交ある彼は、マーブルヘッド教会の教役者として行政的にもマーブルヘッドの発展に貢献し、貧弱な漁村を繁華な港町へ変貌させた。一七〇七年にはフランス領カナダへの侵攻に従軍司祭として参戦し、この時期カード賭博に耽溺して、マザーの譴責を受けたとされる。①

複雑な経歴を辿り、多様な分野で活躍するバーナードの説教は、天罰を受ける民の背徳についても綿密で鮮明である。大地震発生の二十日前に行った若者への講話にも、自戒をも思わせる忠告が含まれる。「悪しき交遊への防壁。交遊は楽しく、人間の本性からして、語り合うのは愉快である。快適な社交と会話には独特の魅力があり、我らは話し相手の態度や動作に染まり易い。」だから悪しき仲間との付き合いは若者にとってきわめて危険である。『旧約聖書箴言』第二章二四および二四に誌される。〈怒れる者と友になるな。猛けき者とともに往くな。かれ。彼らの様に倣いて、罌に落ちむ。〉実に前途洋々たる若者、キリスト教教育のもとで主に祈り、徳の道を歩み始めた若者が、いかに多く悪しき仲間に関われて、美德の規範を放棄し、花咲かすべき若芽を摘み取ることか。彼らの悪例、彼らの誘導や誘惑、さらには真面目な事柄や宗教的な事柄すべてに対する侮辱や嘲弄が、若者に毒となり、害を及ぼす。こうした感染から切に身を護り、生活と仕事に必要な以外は、いかがわしき

① Perry Miller and Thomas H. Johnson, *The Puritans, a Sourcebook of their Writings*. New York, 1963. volume I, p.270.

Erik R. Seemann, *The Spiritual Labour of John Barnard, an Eighteenth-Century Artisan Construct his Piety.*

Religion and American Culture : a Journal of Interpretation. Vol.5, No 2 (Summer, 1995) pp.181, 207.

働き手と交際してはならぬ。」①

こうした地震説教の多くが神の怒りを招くとして住民に改悛を促すのは、不信心や放埒などおおむね個人的なおける罪過である。他方『イザヤ書』でとくに伝えられる社会的な不正への制裁は、バーナードの説教でも語られるが、人間の傲慢として政治的な専横、経済的な非道、身分的な落差を大胆に指摘するは、ポストン・サウス教会の教役者トーマス・プリンスである。

プリンスの説教『地震―神の御業にして聖なる怒りの顕示』その二

一、圧制、神の世界を超えたい欲望、安息日における労働、他者に対する欺瞞と強奪が、神を怒らせる罪過としてまず挙げられる。

貪欲がこうした強烈で危険な悪行の根源にはかならぬ。これらを列挙するのは、それぞれが畏怖すべき審判を下される対象だからである。『アモス』第八章四一―八で誌される。「貧しき人々を苦しめ、哀れな人々を踏みつける汝ら、これを聞くべし！」そこには無慈悲な圧制が支配する。「汝らは言う。新月が過ぎれば、穀物を売り、安息日に小麦を売ってやろう、と。」ここには神を超える世界への欲望と聖なる安息日におけ

① Barbard, Young Persons excited to seek the Lord in their Youth, a Sermon preached at Marblehead, October 8th. 1727. pp.25-26. in Banard, *op.cit.*.

る労働がともに見られる。「彼らは小麦の計量を小に、貨幣の計量を大に作為し、売買を欺瞞する」忌まわしい悪徳商法にして、さらに言う。「貧者を銀で買い取り、窮民を一足の靴と交換しよう。」困窮する人々への卑劣な強要であって、この罪が神を怒らせ、激しい脅威を招く。〔中略〕

二、傲慢も神を怒らせる罪過のひとつであって、厳しい劫罰を下される。

この種の悪徳としては、自己への過信、隣人に対する軽視と侮蔑、榮譽への野望、輕蔑、莊嚴な神に抗する自己礼讃が挙げられる。豪華すぎる衣服と建築と調度、豪華で贅沢な生活様式、他者への傲慢や侮蔑や敵意も同様であり、聖なる支配への蔑視と聖なる劫罰への憤懣もこれに加えられる。

神を激怒させ、厳しい災害で懲される罪過は、大半福音書に誌されるが、とくに畏怖すべき筆致で表現されたものとして『イザヤ書』第二章以降を挙げるに止めよう。「万軍の主の日エホバはあらゆる傲慢な輩と尊大な輩に臨まれ、高ぶる彼らを低く屈められる。また、すべての高い山と丘、すべての高塔と城壁、すべての大型船や壮観に臨まれて、雄大なものはみな崩され、豪壮なものもみな破壊される。かくしてその日大地が震動し、神のみ讃えられる。」

こうした厳しい警告はユダ王ウジアの時代にも発せられた。さきにも述べたが、歴然と予言されたとおり、彼の治世に地震が勃発したのである。さまざまな時代に相継ぐ震動についても疑問の余地はなく、最後の決定的な地震が地球全体を壊滅させるに至るであろう。

これについては『イザヤ書』第十三章以下で一層明白に誌される。「視よ！主の日となり、公憤と激怒をもってこの国を荒地とされ、罪人を根絶される。さらに悪業のためはこの世を、不正のため悪人を劫罰する。また、偉ぶる者の傲慢を挫き、脅かす者の専横を阻む。それゆえ、万軍の主たる神の公憤をもって激しき怒

りの日に、エホバは天を覆し、大地を揺れ動かす。かくして追われる鹿のごとく、さまよう羊のごとく、彼らは消散するであろう。」①

太平洋戦争の渦中から戦後の混乱期へかけて『聖書』に関する講話と著述を続けた矢内原忠雄は、社会的な不正や抑圧への批判が『イザヤ書』に含まれることを強調し、そこで語られるユダ王国ウジヤ王の治世について解説する。「ウジヤ王は非常に偉い王様でありまして、四方を攻めまして非常に国が栄え、富国強兵となりましたが、外国の偶像崇拜や迷信が多く入り来たり、又国民道徳が墮落して、国民が神様を離れたのであります。」聖書研究の素人と断りつつも矢内原は、預言者イザヤがとくに支配階級の罪を重視したと説く。ここでは指導者階級が下層階級を搾取し、弱者貧者から掠奪して、孤児を大切にせず、寡婦の声を聞かない。「へ禍なるかな、彼らは家に家をたてつらね、田畑に田畑を増し加えて余地をあまさず、己ひとり国の中に住まんとす。『イザヤ書』第五章八。へ富者による土地併吞であります。へ禍なるかな、朝つとに起きて濃き酒をおひもとめ、夜のふくるまで止りて飲み、云々。同十一。へ酒宴享楽の生活であります。へ禍なるかな、彼らはいつわりを縄となして悪をひき、云々。同十八。へ政治家の虚偽であります。へ禍なるかな、彼らは悪をよびて善とし、善をよびて悪とし、云々。へ学者の詭弁であります。」こうした国で「主戦政策を採る為には軍事費が多くかかりまして民衆に安息がない。民衆はその為に精神的にも経済的にも休息を奪われるのであります。疲れて居る国民に安

① Thomas Prince, *Earthquake the Works of God*. pp.26-29.

息を与えよ、之が慰めだと神様がおっしゃるのに、汝等は之を聞かない。汝等は馬を走らそう、飛行機を飛ばせよう、やれ軍艦だとか何だとか言つて、神の言葉を聞かないから、走るには走るが敵に逐われて逃げ走るであろう。同書第三十章十六。之に反して汝等が政治的には非戦平和の政策を取り、精神的には平静信頼の態度を取れば、それによりて汝等は救と力を得るのである、と之がイザヤの言でありました。」植民政策研究の専門家であり、帝国主義批判によつて大学から追われる矢内原がこのように語るとき、その脳裡にはファッショ体制と侵略戦争に突入する一九三〇年代の日本があり、来たるべき未曾有の国難が浮かんだと解される。①

第四節 地震の自然的成因と自然科学的考察

ハーバードの著名な法学者ウィリアム・D・アンドリュースは、二五〇年前の地震説教を網羅的に検討し、つぎのように述べた。「総じて十八世紀初めのキリスト教教護者は、自然哲学を宗教の侍女とみなしつつ、新しい科学を啓示宗教の教理と適合させるよう努めた。」そこでは地震の衝撃や被害の模様とともに付随する異常な音響と臭気等についても報告される。「こうした自然現象に係わる記録が、科学的分析への深い関心を示すことは

① 矢内原忠雄著『聖書講義Ⅳ イザヤ書 イザヤ書註解 イザヤ書講義』、岩波書店、一九七八年。

明らかであろう。あまた証言の収集と検討が、事例の集積に基づくベーコンの方法に合致し、ひいては理論的解明へと導くのである。」①

アリンの地震説教には自然的成因への言及も含まれるが、これを超越的な根源に発する付随的現象とみなす見地は他のビュリタン聖職者と同様である。自然科学的考察についてインクリース・マザーの説教は稀薄であるが、先駆とも言えるドーリッテルは、古代以降の地震理論を詳しく点検した。「地震の実体を」とその著『地震の解明と改悛の実践』に誌される。「自然的なものと超自然的なものに区別する必要がある。地球自体は静止と不変を本性とし、すべては神の手から直接導かれるが、自然における第二の成因としてときには大地に揺れや震動が発生する。こうした地震の成因について自然哲学がなした諸説を手短かに説明しよう。」こうしてドーリッテルはセネカやアリストテレスについて述べたあと、十七世紀フランスの自然学者ジャック・ロオーの理論を開陳する。「リオーは『自然学』第三部においてつぎのように論じる。もしも地下の空間あるいは空洞に膨大な蒸気が充滿すれば、新しいロウソクが不意に点火されると同じく、それ自体の拡大と膨張によって上方の地面を押し上げるであろう。あたかも埋められた火薬が、地面を突き上げ、爆発が終わるや、隆起した部分が本来の重みによって当然落下するのである。大地の震動はまさしくここに発する。多くの空洞が近くに伏在したり、相互に何らかの連関があつて、そこに蒸気が充滿し、点火に至れば、多数の震動が相継いで起きるであろう。」②

① Andrews, *op. cit.*, p.285.

② Doolittle, *op. cit.*, pp.26-27, 53-54.

こうした脈絡において一七二七年の地震説教のなかでとくに注目されるのは、ふたりの聖職者、ジョン・バーナードとベンジャミン・コルマンの論述である。博識多才なバーナードは、地震の成因として地中における物質の燃焼だけでなく、周囲に惹起する種々の変動をも指摘した。その説明は十一月二日マールヘッドでなされた説教の本文に含まれる。

バーナードの説教「神の統御し給う地震」 その三

普通の意味における通常地震、大地が自然に動き、揺れる現象について述べよう。この説教でそれを含むのは、私自身の理論を開陳し、やや詳しく語りたいからである。ここで扱う地震には、地球全体の絶えざる動き、地軸を中心に日々回転し、軌道に沿って年毎に運行する動きは含まれぬ。地球の若干の地域においてあちこちの地表が、異常に激しい動き、まるで悪寒に襲われた病人のごとき震えを示すのを拙論では意味する。あたかも海上を走る波濤のように、地表に漸進的な波動が発生する。同時に地中からの圧力で大地を押し上げ、ときにはそれを引き裂いて、大きな亀裂へ周囲を陥没させる。こうした通常地震についてその成因と結果を簡略に述べよう。

一、地震の成因には自然的なものと超自然的なものが考えられる。超自然的な成因は神の手であつて、これについては後段で述べる。ここでは地震を惹起する自然的成因ないし二次的要素について検討したい。地球の内部にはあるいは広大な空間に渡り、あるいは数層にも重なって風や水を含む空間や空洞が存在すると

推論できる。水を湛える小さな空洞は井戸を掘る際にも見出されよう。『創世記』第七章二、『箴言』第八章二八、『ヨブ記』第二十八章四。

地中の火災が存在することは、世界各地における火山の噴火によっても例証される。

さて、こうした地中の火災が風や水に満たされた空洞に近づくとき、必然的に強烈な作用をそこに与える。銃砲の火薬が点火添加されて外気に作用したり、電の火が瓶の水を沸騰させるのにも似ている。熱に触発されて稀薄になった風と水は、激しく動き出し、出口と空間を求めて膨れ上がる。かくして空洞近くの堅い地盤が、拡散する風と水のため、空間を供すべく必然的に激動するのである。空洞から地表まで各地層が直結するため、衝撃の方向、あるいは空洞凹面に対する最初の衝撃に従って、地表もまた必然的に動揺する。この衝撃がさらに激烈となり、地層に裂け目や亀裂が現れると、閉じ込められた風と水の圧力はやや弱くなる。自然的原因で起こる地震は以上のような脈絡で立派に推論できる。①

また、ロンドン王立協会へ報告を寄せたコルマンは、すでに大地震発生の日四日後、ボストンにおいて自然科学的考察を公にしていた。彼の説教集『キリストの御手による摂理の裁き、怖るべき地震で示される神の声、ならびに災厄に蝕まれた大地（四つの説教）』の序言ではつぎの洞見が提示される。

① John Barnard, *Earthquakes under the Divine Government*, pp.77-79, in *Two Discourses addressed to Young Persons: To which is added a Sermon occasioned by the Earthquake which was October 29 1727*. Boston, 1727.

コルマンの説教『キリストの御手による摂理の裁き』

ベンジャミン・コルマン

ボストン、一七二七年十一月二日

序 言

広汎にして慄然とする大地震をもって、崇高なる神が今次示された畏怖すべき摂理の裁き、大地の揺れを感じたあと、近くでも遠くでも地中の音響ないし噪音が同時に聞えたと言う。〔中略〕

大地の震動に驚き、地下の噪音を聞いたこのたび、なぜそれらが遠隔の地点でもほとんど同時に感知されたのか。

その原因は不明であるが、私の推測によれば地中深くに大きな空洞が存在し、そこにおけるひとつの突風が衝撃が周囲の震動を惹起したのであらう。地中には膨大な硫黄性物質が蔵され、そこから雷鳴と雷光が空中へ発する。地上で大量の火薬に点火する光景に喩えてもよい。これが直径五百マイルの大地を揺がすであらう。今次の地震で震動した地域、当地の北端から遠く南方フィラデルファに至るまでは、その範囲に入る。敢えて言おう。このように蔵された膨大な硫黄性物質が突然に発火し、爆破により地中の広大な部分を引き裂く。だが、まず地下深くで発射を続け、上部に強い衝撃を与えて、前述のごとく周囲の地層を一気に隆起させ、同じ時刻に遍く震動を惹き起こす。ただし、そうした範囲の末端では当然揺れがより小さく、中心へ

近づくにつれより大となる。突風によって震動とともに噪音も発生し、揺れを感じたところではどこでもそれが聞こえ、噪音の強弱も震動の大小に比例する。

以上がこの問題に対する私の率直で手短かな推論であるが、嬉しくもこれと同じ見解が見出される。マーブルヘッドからのそうした書簡に意を強くして、震動は広く同時に発生し、その方向は下から上へであって、地表に沿うのではない、と結論しよう。事物の本性からしてこうした見解が明らかに正しい。なぜなら、どの地点でも震動と噪音がほぼ同時に発生し、その方向は下から上へであって、地表に沿わぬよう我らの五感も感じ、聞くからである。

したがって、震源から放射状の先端、たとえばフィラデルファで感じる震動と噪音は微弱である。また、放射状をなす距離に比例して、いかなる深さで震動が発生したかをも推論できよう。震動の強さとともに燃烧し噴出する物質の膨大な量についても同様である。それほどの規模と程度の震動は、燃烧せる烈風に起因すると、きわめて容易に説明できる。①

「バーナードの洞察とともにコールマンの論究は」とアンドリュースは歴史的に評価する。「地震理論の発展に多大の貢献を果たしたと考えられる。一七二七年の地震に際する波状運動の認識は、二五年後に現れる同じ植

① Benjamin Colman, *The Judgments of Providence in the Hands of Christ*. Bosto. 1727. pp.v-vii, *Evans Early American Imprint Collection*. online.

民地人、ハーバードのジョン・ウインスロップの理論に先立つものである。地震の特性として波動を最初に認識した功績は、ジョン・ミチェルの著述、一七六〇年『哲学紀要』収録の〈地震の原因と観測に関する推論〉にながらく帰せられてきたが、近年ウインスロップの論文、一七五五年刊行の『地震についての講義』にその栄誉が移された。しかし、ウインスロップやミチェルが理論を発表するかなり以前に、実際にはバーナードとコールマンが地震の波動に関する考察を公にしたのである。すくなくともバーナードとコールマンの場合には、一七二七年の地震を契機として植民地アメリカからきわめて新鮮で革新的な科学認識が発信されたと言える。」①

① Andrews, *op.cit.*, p286.

第五節 聖なる鉄槌と救済―その歴史と現代

トルコの西端スミルナ（イズミール）は帝政ローマの時代、小アジアきつての都市国家として繁栄し、一七八年激烈な地震により壊滅した。当地に居住した詩人アエリウス・アリスティデスは、〈哀歌スミルナ〉で深い悲嘆を詠う。「かくも凄まじき災害に流れる涙あたかも滝のごとし。世界から称讃と憧憬と希望を寄せられたこの都市を哀悼すべく、ありとあらゆる楽団の演奏と合唱を調えるべし。」その数年前アエリウスはローマ皇帝マルクス・アウレリウス帝をここに迎え、港湾都市スミルナの繁栄と美観を感嘆させた。震災の直後彼は復興への支援を懇願して皇帝に書簡を捧げる。「小アジアの精華、ローマ帝国の宝玉であるスミルナは、地震と火災に襲われ、壊滅しました。神の御名において陛下にご救援を懇願致します。神々をはじめ、古今の皇帝ならびに元老院の加護によりギリシャ一帯でもっとも繁栄した都市が、いまや未曾有の災厄に陥りました。」^①「陛下が感心された港湾は水没し、華麗な市場は荒墟となり、市街の装飾は消え、男たちの錬成場も破壊され、寺院もいくつか倒壊しております。世界でもっとも壮麗と讃えられた都市が、もっとも醜惡な様相、荒墟と遺体の山岳にいまや変貌しました。」^①

① Aelius Aristides, *The Complete Works*, Traduction by C. A. Behr, 1981. Vol I, pp.7-8, 10-13.

一七〇五年になされた説教「ニューイングランドで発生する地震」において博学なインクリース・マザーは、スミルナなど古代の事例を挙げたあと、身近に迫る神の鉄槌について語る。人類はオリエントやヨーロッパにおいて幾多の地震に曝された。「一六九二年神は大都市ロンドンを揺がせ、住民を驚愕せられたが、慈愛深き摂理によりほぼ一分で鎮まり、被害を免れた。」アメリカ大陸について言えば、「十七年前南米において地震によりリマ市が全滅し、すべての建物が倒壊して、多数の住民が荒墟に埋もれた。北米も例外ではない。十五年前アンティグア島が怖るべき地震に襲われたではないか。当時の通信によれば、隆起せる大地が、波濤のように旋回して、山岳の岩石を放擲し、家屋を粉碎するとともに、各処を呑み込んだ。」^①

一七二七年の説教のなかで前世紀からの地震をとくに詳しく語るのは、ボストン・サウス教会の教役者トーマス・プリンスである。十一月二日オールド・ノース教会へ出向してなされた説教第一に続いて、同月九日宮まれた説教第二につきぎの長文が含まれる。

プリンスの説教『地震―神の御業にして聖なる怒りの顕示』その三

過去の歴史をすべて遡る必要はないが、近々六十年間だけについてとくに畏怖すべき事例を検討し、私どもの状況と同じく、それらにあっても神の感銘すべき寛恕と慈愛を必要としたことを認識して頂きたい。

① Mather, *op. cit.* pp.25-28.

我らの地と同じ緯度に属する国ベルシャでは、一六六七年三カ月にわたり異常な地震が続発し、家屋、塔、教会を倒壊させたのみならず、瞬時にして八千人の男、女、子どもを生き埋めにし、一日のうちに国中で多数の村落と都市を壊滅させた。いくつかの山岳は地平まで崩れ、大道も破壊されて通行不能となる。ほぼ四年後にも同じ地域で地震が再発し、年初めの日に数多の住民と家屋が地に埋もれた。

我らの地とは同じ緯度であるギリシャの有名な都市スミルナは、世界でもっとも好適な入江に位置し、きわめて至便な港湾であつて、九万の住民を擁し、トルコ帝国への交易において要所をなす。一六八八年六月三十日昼頃ここで怖るべき地震が勃発し、一分間にして大半の建物を倒壊させ、残余をもすべて破壊して、無限の財富を陥没させた、地下に生じた亀裂へ城砦も沈下し、五千人が命を奪われる。一時間後に発生した火災が、惨状を募らせ、地震に耐えた少数の家屋を焼き尽くした。

ほぼ同じ緯度にシチリア王国では一六六九年三月八日の夜大地震が発生し、一都市の全家屋を揺がし、他の二都市でも被害を与えた。これより一層注目すべきは一六九三年一月一日・二十日に同国で勃発した激烈な地震である。一月十九日金曜の夜静穏かつ温暖で快適な宵に激烈な震動が始まり、これを逃れる住民は教会や広場へ避難に走った。ついで日曜には激しい津波が押し寄せて、四分間にして猛烈な水勢で五五の都市および町々に氾濫し、美麗な市街、教会、コレージュ、城館、高塔、宮殿を完全に荒廃させる。戦慄する「民が祈りを捧げるさなか、大寺院が突如倒壊し、数千の信者が圧死した。

なおまた、由緒ある著名な麗都、富と学問の府カタニーヤも完全に粉碎されて、住民の被害は大きく、人口一万八千九百のうち一万八千が死亡した。

同国東端の主要都市パレルモでは大半の建物が被害を受けたものの、住民は無事であつた。なお、昨年の九月一日・二日にここで起きた大地震について、当地で刊行された証言を私たちは参照できる。ここでも静穏にして晴朗な天候のもと、午後十一時から十二時の間に揺れ始めた。最初の震動はさして強からず、無害であつたが、次第に強烈となり、二十分続く。やがて大都市の四分の一が転覆し、瓦礫で覆われた。ある地区では街路が広く地割れし、悪臭が発散する。酸化した石塊を含む火災が昇って、硫黄性の猛火が半時間足らずで地域全体を焼き尽し、五日後に無惨な遺体の犠牲者が焼け跡から掘り出された。この災害における犠牲者は約一万五千と算定される。

東インド諸島バタビアで一六九九年一月四日・五日に地震が発生し、十六もの丘陵が隣国へと崩れ落ちた。さらに南米の都市リマでは一六八七年十月十日月曜の午前四時に凄まじい噪音とともに激しい地震が発生した。若干の家屋は倒壊し、数名が圧死した。五時にも同じく噪音と揺れを感じ、だれもが無事と安堵した六時に、第三の異常な轟音と激烈な揺れで第三の地震が襲った。怒濤が堤防を越え、教会の鐘が自然に揺れて鳴り続ける。甚大な被害に至り、それを免れた建物はない。五千名以上の死者が確認され、日を追つてその数は増すばかりである。①

一七〇七年ハーヴァード大学を卒業し、西インド諸島やマデira諸島を旅したトーマス・プリンスは、その後イギリス各地で布教活動に参じる傍ら、植民地史や自然学への関心を深めた。ボストンへ帰国して一七一八年よ

りオールド・サウス教会の教役者として選ばれ、一七五八年に世を去るまでその職にあった。「学識の深さと歴史への精通においてコットン・マザーに比肩し、蒐集家でもある」彼は、大部な宗教史『ニュートンランド年代記』を遺すとともに、多彩な蔵書一五〇〇巻でも知られる。① ペンシルベニア大学の教授テリドール・ホルンベルガーは、この地で「ニュートン主義の科学を宗教と融合させる努力に、プリンスは指導的役割を担った」と論考する。「チャールズ・チョンシイに代表されるつぎの世代に彼は連携し、地上における万物の存否や幸福を神が左右するのは、直接御手からではなく、自然に定められた理法によるとの確信へ導く。」こうした見地から彼は惑星や北極光を観測し、磁気と電気を観察し、干魃や長雨についても説教した。地震の歴史と様相に関する記述もそうした自然学的関心の所産であって、彼の説教をさらに続ける。②

プリンスの説教『地震―神の御業にして聖なる怒りの顕示』その四

なかでもとくに銘記すべきは、われらの近辺で起きた地震にはかならぬ。

一九六二年六月七日ジャマイカ地震の怖るべき悲報を記憶される方は、この集会のなかにも多数おられる

① Thomas Prince, *Portraits at the American Antiquarian Society*. online.

② Theodore Hornberger, *The Science of Thomas Prince. The New England Quarterly*, Vol. 9, No. 1 (Mar., 1936). pp.28-33, 42.

であろう。この地震は晴朗にして静穏な昼、十一時から十二時の間に発生した。地震かといぶかるほどの弱い揺れでまず始まる。証言によれば、第二の震動はやや強く、雷鳴のごとき地下の轟音を伴うので、住民は家々から脱出し始めた。しかし、無念！安全確保の用心に余裕がない。その直後もっとも強烈な第三の震動が襲い、これによって首都ポート・ロイヤルが九分どおり、また埠頭の建物すべてが沈没した。

街路もまた海流のように隆起した。そこに建てられたすべてを持ち上げ、亀裂へ突き落とす。激烈な揺れのため住民は伏して膝で身を支え、街路の安全な場を捜した。数カ所で大地が引き裂かれ、恐ろしい勢いで突如開き、すぐさま閉じた。こうした亀裂が同時に二百ないし三百箇所生じたとも言われる。ところにより住民が呑み込まれ、地に埋まり、窒息して死ぬ。頭部、手足だけが地上に見える場合もあった。他方奔流は住民を巻き込んで押し流し、辛うじて柱や梁に縋る者もある。他は後日遺体として発見され、大抵は砂に覆われていた。完全に水中へさらわれたあと、海流とともに街路や港湾へ打ち上げられたものである。多くが一瞬にして消え、二度と現れない反面、神の奇蹟的な慈愛より救われた事例も存在した。

比較的小さな亀裂もあるが、大きな亀裂は広大な建物をも鯨呑する。なかにはそこから水流が空高く噴出し、耐え難い悪臭を一面に拡散する。すべての埠頭と多くの建築が同時に陥没した。不意の異変により避難の余裕がない。上階に居合わせた人たちは、逃れる中途の階段で波濤に襲われた。完全に埋没した家屋もあり、瓦礫の山と化した建物もある。堅固な建築を連ねたもつとも豪華な大道すら水面下約三十フィートへ陥没した。

軍艦など船舶数艘も港で転覆し、沈没した。突然海流が異常な高揚と膨張を呈し、激烈に船舶を巻き込む。網網を切断されたそれらは沈没した建物の上へ突進した。こうして大地がいれば攪撃し、全世界の滅亡が

目前であるかのように感じて、住民は幽霊のごとく蒼白になり、戦慄して右往左往する。

しかし、都市よりも地方において震動はより激烈であって、地方では建物の被害が一層甚大であった。縦百五十マイル、横六十マイルにわたる全島で、大半の家屋が地震で倒れるか、津波に流されたのである。ジャマイカに五千の町があったとしても、すべてが破壊されたであろうとも言われる。

深さ三十センチの井戸水が上まで噴射した。若干の地域では大地が大きく地割れして、大量の水が噴出する。晴朗で会った青空は、一分ほど焼きがまのような鈍い赤味に染まる。山岳の崩れによって恐ろしい噪音が生じ、その轟きは麓にまで響いた。

山岳地帯でもっとも激しく揺れた。ときには山の崩潰が道路や河流が遮断したり、いくつか重なり合う。大きな山も裂けて崩れ、山上の樹林をすべて倒し、一マイル離れた居住地を住民もろとも押し潰した。陥没し、すっぱり燕呑された高山もある。

北部では農園の大半とともに経営者の邸宅が陥没し、作業員、家屋、農作物もすべて亀裂に呑み込まれた。そこには千エーカーもの湖が出現したが、それもやがて消え去り、かつての家屋や農作物などなんらの跡もそこには見られない。

以後も実に二カ月揺れ続けた。その間山岳も動揺し、凄まじい噪音で吼え続ける。都市部でさらに約二千人、その他で千人死亡した。夜の地震がなければ、被害はより少数であつたろう。多数の遺体が港の沿岸から沿岸へと漂い、風や波によって集積される。震災に続いて伝染病が蔓延し、多くの場合ボートロイヤルで生き延びた半数が、避難したキングストンにおいて病死したと伝えられ、一カ月で五百の墓が造られ、ひとつの墓に数人が葬られた。そこでは二千人が、また他でも千人以上が消えた。

一六八七年二月十九日午前八時に小さな地震が起き、全島と周辺に及んだが、これこそ私どもが経験する震動に似ている。それは僅かな間隔を挟んで三度揺れ、それとともに微かな噪音が約一分続いた。大地も波濤のように隆起し、震動は北方へ移っていく。若干の家屋がほとんど完全に破壊され、土台が隆起したごとく、とくに上階の部屋が転落し、下階よりも一層破壊された。棚の上の物品も大抵落下する。住民はみな恐慌状態に陥り、四年九カ月にわたり揺れが続いたあと、異変は稀となった。

建国の父たちがここに到着して以来、最近の九十年間にすら地震の発生は八度か九度に及ぶ。それらの四つか五つ実際に軽小であるが、第五回の地震は大規模で、慄然とするものであった。

モールトンの記録によれば、第一回は一六三八年六月二日に発生し、怖るべき大地震であった。それに先立って遠雷のごとき噪音が聞える。響きは北から南へと推移し、近づくにつれて大地が揺れ始めた。震動はたちまち激しくなり、家具が倒れたり、破損する。家屋にいた人たちは倒壊の危険を感じ、戸外の人たちは倒れかけて、外壁で身を支えた。半時間のさらなる震動と噪音は最初ほど強烈ではなかった。地震は先住民の居住地にも及び、海上でも港湾の船舶が揺れた。同じく一六三八年にニュージーランドで別の地震も起きたとモールトンは伝える。

また、一六六二年一月二六日午後三時に巨大な地震が起き、当日夜の余震は、最初よりやや軽小であった。ついで同月二八日午前九時頃に震動があった。

以後も小さな揺れは経験したあとで、今次の地震はもつとも怖るべきものである。①

さまざまな時代や地域における大震災の列挙に続いて、ニューイングランドの地震について語るプリンスの説教には、神護による防災と救済への願望が根底にあった。神に定められたこの地には、罪深いとは言え、本来地に神に選ばれた民が住む。「こうした歴史観へ」と研究者アンドルーズは洞察する。「ビューリタンは地震の体験を組み込んだ。この見地から過去の震災とみずからの被災を考察し、ふたつの結論を明らかに得たのである。第一には一七二七年のニューイングランドも同じく大きな地震の襲われた。とはいえ、第二の帰結がそれに続く。すなわち、過去の地震がベルシャ、イタリア、南米、西ヨーロッパ各地を壊滅したのに反し、一七二七年の地震に際しニューイングランドはまさしく被害を免れた、と。」②

こうした神護のよる防災と救済への期待をとりわけ明白に示すのは、詩人の才能をも有するジョン・ダンホースの地震説教である。彼もまたさまざまな大震災を列挙したあと、ニューイングランドにおける被害の模様を特筆し、神護を仰ぐべく住民の改悛と肅正を勧める。後年ジョン・ミチエルがヨーロッパや新大陸の地震とリスボン大地震を対置して、地震発生の自然学的成因を究明するのに先立ち、これらの地震説教は各地における近年の震災と一七二七年の大地震を比較して、ニューイングランドのため改悛と救済の活路を探究したと言えよう。

① Prince, *Earthquake the Works of God*, pp.35-39.

② Andrews, *op.cit.*, p.288.

ダンフォース 今次の地震に際する説教

ドルチェスター、一七二七年十一月七日

会衆への勧告

一、慈愛深き神が我ら敬虔なる者多数の勇氣を鼓舞され、謙抑で真摯な懇願を許されて、これなる怖るべき鉄槌を中止し給い、わが国土各地の地震、衝撃、雷鳴を鎮め給うよう、聖なる寛容と憐憫を祈願するよう勧める。つねに公正である主を讃え、聖なる慈愛がながく続くように！。

二、恵み深く主から授けられた改悛の時間を充分活用されたい。因みに六十年前ベルシャの地震では成人の男性だけで八万人が歿した。また、四十年前リマの地震では五千人以上が命を奪われた。さらにその五年後イギリス領ジャマイカでも三千人が地震で即死し、加えて三千人以上が有害な外気で病死した。昨年一万五千人を喪ったシチリアの地震では、以前にも六万人が死んでいる。岩窟、石堀、建物が破壊されたにもかかわらず、神の崇高なる慈悲により我らのニューイングランドではひとりも喪わなかった。恵み深き神と天への頼もしき仲裁者に幸あれ！地震とともに火山のため深刻な地域もある。山岳や溪谷でも火焰や硫黄の凄まじい炎上が発生し、沿岸部の恐怖と破壊へ進むのである。アメリカには六十以上の火山があると聞く。だが、あるいは地下に火焰が潜み、燃えるとしても、我らのまわりに火山は実在しない。他方グリーンランドやタタールなどニューイングランドの北方には火山が構える。三九年前一瞬にして五千人が歿したスミルナ

におけると同様、己れのはかない命や財貨がいつまで続くか、我らについても不確かである。その日がいつ来るかは知り得ない。授けられた日々を大切に、歎知に照らされ真心を尽すよう勧める。〔中略〕

我らの大いなる危険。

聖なる言葉が時かれながら、その発現が遅々とするいま、現世での安楽と欲望に多数が心を奪われぬよう、またこの地における不当な行為や不正な取引、さらには学校、布教、公安、行政、救貧へ向けての冷淡と吝嗇を根絶するよう、戒めとして神は撃砕の大車輪を発動したのである。

崇高なるキリストの聖地、当地でのさらなる大いなる危険、際限ない酒亭の激増を止めるべし。酒場浸り、飲み仲間、歓楽の時間、己れと一家への害毒を断ち切るべし。不道德な原理、偽りの教義や理念に欺かれて、さまざまな性的放縦、肉欲や色情や好色に耽るのを阻止すべし。①

牧師ジョン・ダンホースは、一六六〇年ロクスビューリーで生まれ、ハーバード・カレッジの卒業後ドルテエスター教会の牧師に選ばれた。博識でとりわけ数学に精通し、穏和にして慈愛深き性格と伝えられる。彼の父はインディアンへの著名な伝道師であり、歴代のダンホースは歴代詩人の名家として知られる。多くの哀歌を遺すジョンみずからは、一七二七年大地震の直後ふたりの故人を弔う挽歌を綴り、右に引用する地震説教の補遺として

① John Danforth, *A Sermon occasioned by the Late Great Earthquake and the Terror that attended it*, Boston, 1728, pp.17-18, 20.

公刊した。①

キリスト教の地震論は聖なる劫罰との所説と往々狭く解されるが、罪深き民に授けられた改悛と救済への導きにほかならぬことこそ重要である。信仰深き者への神による世界の創造と統御を教理とするジャン・カルヴァンは、地震、疾病、戦争などを背徳への懲罰と認めつつ、改悛せる民には破滅からの救済が授けられると説いた。「人類の統御として摂理により至福を遍く授けられる神は、同時に厳しい裁きを發揮され、正しき人々には慈愛を、不正で邪悪な人々には懲罰を与えられる。公正な立場と権利の守護者たることを明確に示すため、歴然たる罪惡に神は報復される。かくして正しき人々は聖なる恵みによって繁栄し、親身に協力して、互いの労苦や悲哀をいたわり合い、その身が救済されるよう、つねにすべてを準備する。」「神の全能と叡知は暗闇のなかでも隠されていない。背徳者の勢威は抗し難く映じるが、一瞬にして打倒され、その傲慢も砕かれる。あらゆる城砦の破壊、あらゆる武器と装備の破損によって、彼らの軍勢は解体し、彼らも組織も壊滅する。激しく狂わしく天をも超えむとする不遜が、奈落の底に突き落とされる。他方貧しい者が塵埃から、蔑まれる者が泥濘から救われ、苦しめられた人や抑圧された人も苦難から解放される。武器を有せず、戦いに慣れず、劣勢にして策略なき彼らが、多大の装備、軍勢、戦力をもって襲い来る敵に、勝利するのである。人間業ではない力能、天上から地に降される力がここに認められるではないか。聖なる叡知の発露として、すべてを至当かつ整然と配置され、ま

① Thomas A. Ryan, *The Poetry of John Danforth, American Antiquarian Society, Proceedings*, N.S.78 (1969), pp.130-131, 141, 173-177.

さしく〈この世の知恵は神の前に愚かとなる〉『コリント前書』第三章一九。」①

罪深き日本にとって関東大震災とともに第二次大戦と日本の敗北も摂理による鉄槌と考えられる。内村鑑三のもとで信仰を深め、ファシズムと侵略戦争に抗した矢内原忠雄は、戦後日本の民主化や憲法の制定についてつぎのように認識する。「太平洋戦争における日本の敗北とその後の被占領状態は、バビロン捕囚に比すべきものであります。神はアメリカを用いて日本を打ち破り、日本を占領状態におき給うた、それが神の御ところであるということ、私はいろいろの点で見えております。」アメリカの統治によって与えられた「絶対平和の憲法は、古今無比のものであって、いままでもかつて人類の歴史でこの国ももったことのない憲法であります。内村鑑三先生が絶対非戦・軍備全廃ということ、信仰として論じ、主張されていた事が、現実に一国の憲法となった。これは驚くべき歴史上の事実であります。これは神がアメリカをして日本にかかる憲法を持たしめたのであります。」憲法で保障される基本的人権についても同様である。「日本の憲法は基本的人権を中心とした民主主義の憲法となり、言論思想の自由・宗教学問の自由がはっきり決められまして、キリスト教の伝道及び信仰が自由になった。これは驚くべき事実であります。」しかし、なお多難な将来について矢内原は、聖なる摂理の導きと救済への恩寵を祈念する。「世界情勢の変遷と国内事情の変化を思い、又我々の敵たる悪魔の勢力を考えまして、私のたま

① Calvin, *op. cit.* Tome I, pp.14-15.

〔参照〕カルヴァン著、前掲。第一巻、七一・七三頁。

しいは寂寞であります。自分の半生を考え、殊に戦争中の八年と戦後の六年半を考えまして、〈我はいたずらに働き、益なく空しく力を費やした〉という、感想をしないでもありません。」「たとい世は如何ように移り変わろうとも、我々はイエス・キリストの福音の上に平和と、自由と、希望をもち続けて行きたい。たとえ見えないきすみれの花一茎であろうとも、世の終の時に神の聖国の一ものとして、咲き出でたいと希う。これが神の国を地上に立てようとして努力をする者の人生である、と信するのであります。」①

現代の日本を襲う数々の地震、水害、悪疫等の際してきわめて深刻な問題のひとつは、原子力発電所の被災による環境破壊であろう。さきに参照したホームページ、〈東北教区東日本大震災被災者支援プロジェクト〉によれば、大震災の翌年日本聖公会主教会からつぎのようなメッセージが発せられた。「一年前の今日、東日本を襲った大地震は、多くの家屋を倒壊させ、大地震によって引き起こされた大津波は、東日本の海岸線を襲い、家屋や工場を押し流し、多くの尊い命を奪い去りました。津波に襲われた福島第一原子力発電所は、制御能力をすべて失うという最悪の事態に陥り、原子炉内の核燃料融解、原子炉建屋の水素爆発による破壊によって大量の放射性物質が空気中に飛散し、土や海、建物を汚染し、住民は避難を余儀なくされました。一周年を迎える今も、多くの被災者が恐怖と不安におびえながら、仮設住宅や避難先での生活を送っておられます。」この宗教団体は被災地域に拠点を設け、被災者救援と社会復興のための活動を開始した。なかでもとくに憂慮されるのは原子力発電所の破壊と原発安全神話の崩壊である。「東日本大震災は私たちに多くの教訓を残しましたが、その中でも今私

① 『矢内原忠雄全集』一九六四年、岩波書店。第二十巻、三〇―三一、四四―四五頁。

たちが避けて通れない問題があります。世界で唯一の被爆国である日本は、原爆の悲惨さと核兵器廃絶を世界に訴え続けてきました。その一方で、原子力の平和利用の名のもと、原子力発電所が日本各地に建設され、より多くの電力を消費することで、私たちは、快適で文化的な生活を享受してきました。しかし、東日本大震災は、原子力の平和利用を標榜した原子力発電の安全神話を粉々に打ち砕きました。今後は、原子力に依存するエネルギー政策の転換と、私たちのライフスタイルの転換が強く求められています。」十字架での処刑のあと無力感と絶望感に包まれる弟子たちを、復活したイエスは岸边で待ち受け、焚火を起して、彼らに魚とパンを供した。愛の絆で結ばれた人たちによる新しい世界の創造を主は命じたのである。「東日本大震災から一年、大地震・大津波で打撃を受けた町々、村々では復興への槌音もまだまだかすかにしか聞こえてきません。そして放射能汚染地域の被災者には、いまだに解決への見通しは立っていません。被災した方々、また、身近な人を失った方々が穏やかな生活を取り戻すには、さらに多くの歳月と困難を伴うことになるでしょう。そのような苦しみの中にあっても、神様がお一人お一人に寄り添って心と体をお支えくださり、生きる勇氣と希望が与えられますよう切に祈ります。」①そして、被災から十一年後にも同地域主教座聖堂はいわば地震説教においてつぎのように祈られる。「私たちが心に留めねばならないことは、今年の二月二五日現在で震災のために今も避難生活を余儀なくされている方々が、約三八、〇〇〇人もおられることです。そしてその中で約二七、〇〇〇人も福島県民の方々

① 日本聖公会主教会「東日本大震災から一周年を迎えて」日本聖公会〈東北教区東日本大震災被災者支援プロジェクト〉。 <https://nssk-tohoku.com/support/preach/>

が、福島県以外の場所に避難しておられることです。これは言うまでもなく、その大多数が東京電力福島第一原子力発電所の事故による放射能汚染が原因となっています。ことに原発から北西方向にある双葉町や浪江町では、いまだいほぼ全域が帰還困難区域に指定されています。徐々に避難区域に指定された所が解除されてきてはいませんが、社会インフラが整備されていないこともあって、帰ることはなかなか難しいようです。そのような状況の中で、国や東京電力は処理しきれないトリチウムを含む大量の汚染水を、一定程度希釈した上で海に放出しようとしています。」「しかし問題は、汚染水を海に放出するかどうかを含めて、原子力発電所の存在そのものにもあると言えるでしょう。私たちは長い間、原発の安全神話を刷り込まれてきましたが、このような事故が二度と起こらないという保証はどこにもありません。地球温暖化という環境問題も含めて、私たちは風力発電などの再生可能エネルギーの利用に大きく舵を切るときが来ているということなのでしょう。もちろんこれらの再生可能エネルギーにも、全く問題がないのかというと、必ずしもそうではないことも知っています。しかしそうであっても、今、私たちは未来の人や神様の被造物にとって安全な環境を受け継いでいく責任があると思います。」「マルコによる福音書第二章二二節には、「誰も、新しいぶどう酒を古い革袋に入れたりはいしない。そんなことをすれば、ぶどう酒は革袋を破り、ぶどう酒も革袋も駄目になる。新しいぶどう酒は、新しい革袋に入れるものだ」という御言葉が記されていました。今までお話ししてきましたことから言えば、〈復興〉とは物の復興も大切ではないが、それ以上に一人ひとりの人を、そしてその関係を大切にすることで、初めて私たちの復興があるのではないのでしょうか。また、地球環境を破壊するようなエネルギーの用い方ではなく、地球環境と共に在るエネルギ

―を用いていくようにすることが、この御言葉に従って生きることではないかと思えます。」①

初出 二〇二二年十月二七日

① 仙台基督教会 主教 ヨハネ吉田雅人「東日本大震災十一周年の祈り」、日本聖公会、〈東北教区東日本大震災被災者支援プロジェクト〉 右出。